

平成9-11年度 大学入試センター試験に おける地歴・理科A科目および 国語Iの受験動向調査

大学入試センター 内田 照久, 林 篤裕, 岩坪 秀一

1. はじめに

大学入試センター試験では、学習指導要領の新課程への移行に伴い、平成9年度から新科目として地理・歴史のA科目、理科IのA科目、および国語Iが導入されている。これらA科目の高校での標準履修単位数は、従来型のB科目の4単位に対して2単位である。また国語Iは高校の必修科目であり、その内容を総合的に発展させたものが従来型の国語IIとなっている。

これら新科目の取り扱いについては、個々の大学が個別に科目を指定することになっており、センター試験においては特に高校での履修要件等による受験科目の制限は設けられていない。従って、これら新科目と従来型の科目を共に受験科目として採用した大学においては、標準履修単位数が異なるにも関わらず、選抜時の評価は同等に扱われることになるため、高校での学習経緯の異なる学生が入学して来ることになる。

大学入学後の教育を考慮した場合、これら新科目を受験した入学者は、従来型の科目を受験してきた学生と異なった特性を持つかが注目される場所である。さらに遡って、どのような背景を持った受験者が新科目を選択して受験しているのか、といった受験者のプロフィールを把握しておくことは、これらの科目を入試科目として指定する際の参考となる。

そこで国立大学入学者選抜研究連絡協議会(略称「入研協」)において、大学入試改善研究の一環として、センター試験の受験科目と

高等学校での履修科目との関係を調査・分析する大学間の共同研究プロジェクトが発足した。これは、平成9年度から11年度まで3年間実施されたが、このたび、プロジェクトの終結にあたり、調査結果の概要を報告することになった。既にプロジェクト参加大学には調査結果の報告がなされているが、本稿ではその報告をふまえ、さらに大学入試センター研究開発部で行われてきた調査・研究の結果も加味して、新科目の受験動向に関する検討を行う。

2. 調査の実施

2-1 調査対象

平成9-11年度のセンター試験受験者の中で、下記の科目のいずれかを受験した者。

- (1) 地理・歴史A科目(世界史A, 日本史A, 地理A)
- (2) 理科A科目(物理IA, 化学IA, 生物IA, 地学IA)
- (3) 国語における国語I

2-2 共同研究への参加大学

入研協からの照会により、研究参加協力が得られた大学数(学部のみ参加を含む)は次の通りである。平成9年度(H9)が49大学(提供データ数: 延べ10,994名分)、平成10年度(H10)が54大学(19,240名分)、そして平成11年度(H11)が52大学(17,317名分)であった。

2-3 調査実施

各年度とも5月下旬に調査票が参加大学に送付され、入試担当関係者の責任のもとで統計的な集計がなされた。その結果を基に、大学入試センター情報処理課、および研究開発部のスタッフが全体の整理作業にあたった。

3. 文科系・理科系別の出願状況

3-1 地理・歴史A科目受験者の文科系・理科系への出願状況

平成9-11年度について、地理・歴史教科をA科目で受験した者が、文科系・理科系のいずれに出願したかについて集計した。表3-1にその人数の割合と平均点を科目別に示す。

表から読み取れるように、世界史A、日本史A、地理Aのいずれも理科系出願者が過半数を超えていた。特に地理A受験者では、理科系への出願者が2/3以上を占めている。しかし、平均点では3科目とも文科系出願者の方が一般に高いのが特徴である。

3-2 理科A科目受験者の文科系・理科系への出願状況

理科をA科目で受験した者の文科系・理科系の出願状況を、表3-2に示す。

平成9-11年とも、生物IA、および地学IAにおいて、文科系への出願者の割合が高い傾向が見出された。なお、平均点については明確な傾向は見出されなかった。

3-3 国語I受験者の文科系・理科系への出願状況

国語を国語Iで受験した者の文科系・理科系への出願状況を表3-3に示す。各年度とも、国語Iでは理科系への出願者の割合が、いずれも過半数を超えていた。一方、平均点では文科系出願者の方が安定して高かった。

3-4 文科系・理科系出願者別の特徴

地歴、理科、および国語を通じて、新科目受験者の文科系・理科系への出願の傾向は、従来の科目での出願傾向とほぼ対応しており、受験者は新科目においても従来型科目と対応した科目選択をしていることが窺える。そして、新科目導入後の平成9年度から11年度までの3年にわたって、この文科系・理科系別の出願者の割合は比較的安定した様相を示していた。

表3-1 H9-11 地歴A科目受験者の文科系・理科系出願状況 ([] 内は平均点)

		文科系	理科系	不明	総計 (100%)
世界史A	H9	11.5 % [67.6]	57.7 % [55.8]	30.8 % [57.6]	956 名
	H10	17.6 % [66.9]	54.1 % [55.8]	28.4 % [58.3]	1023 名
	H11	16.8 % [59.6]	53.9 % [52.2]	29.3 % [54.1]	583 名
日本史A	H9	10.9 % [60.0]	57.8 % [51.9]	31.3 % [56.7]	1216 名
	H10	16.0 % [57.4]	54.3 % [51.6]	29.7 % [53.0]	1224 名
	H11	14.1 % [65.7]	54.5 % [53.7]	31.4 % [57.5]	624 名
地理A	H9	3.8 % [63.4]	75.7 % [61.4]	20.5 % [61.5]	1307 名
	H10	9.4 % [67.8]	67.3 % [64.0]	23.4 % [63.8]	1687 名
	H11	8.3 % [56.2]	67.6 % [55.4]	24.1 % [55.1]	1570 名

表 3-2 H9-11 理科A科目受験者の文科系・理科系出願状況 ([] 内は平均点)

		文科系	理科系	不明	総計 (100%)
物理 I A	H9	32.2 % [75.4]	38.6 % [73.9]	29.2 % [71.6]	394 名
	H10	32.0 % [71.8]	35.0 % [71.9]	33.0 % [70.0]	734 名
	H11	37.4 % [73.7]	28.2 % [76.8]	34.4 % [73.4]	433 名
化学 I A	H9	27.8 % [58.1]	32.0 % [56.1]	40.2 % [51.9]	809 名
	H10	32.2 % [68.1]	31.9 % [64.2]	35.9 % [63.0]	1857 名
	H11	28.5 % [64.0]	32.6 % [62.8]	38.8 % [61.2]	1223 名
生物 I A	H9	51.4 % [63.0]	7.6 % [64.8]	41.0 % [63.8]	753 名
	H10	51.8 % [65.4]	5.8 % [62.4]	42.4 % [64.1]	1781 名
	H11	51.1 % [62.4]	5.6 % [62.7]	43.2 % [64.1]	995 名
地学 I A	H9	42.2 % [66.6]	18.8 % [65.2]	39.0 % [60.8]	574 名
	H10	41.3 % [58.7]	16.3 % [56.5]	42.4 % [56.2]	1750 名
	H11	37.0 % [63.9]	18.8 % [62.1]	44.3 % [61.3]	1288 名

表 3-3 H9-11 国語 I 受験者の文科系・理科系出願状況 ([] 内は平均点)

		文科系	理科系	不明	総計 (100%)
国語 I	H9	15.9 % [174.8]	52.8 % [163.5]	31.3 % [168.7]	6749 名
	H10	20.8 % [162.5]	51.2 % [152.6]	28.0 % [157.1]	13466 名
	H11	19.2 % [164.6]	53.4 % [150.1]	27.4 % [158.6]	11858 名

4. 高校での科目履修状況とセンター試験での成績

4-1 地理・歴史A科目

次にセンター試験でA科目を選択して受験した者が、高校で履修していた科目を整理する。平成9-11年度の地理・歴史のA科目受験者の高校における該当科目のA、B科目の履修状況、およびセンター試験での平均点を集計した。そして、世界史A、日本史A、および地理Aについて、それぞれ図4-1、図4-2、図4-3に図示する。

4-1-1 世界史A

世界史Aの受験者の中には、高校でA科目のみを履修してきた者ばかりでなく、B科目の履修者、さらにAB科目を共に履修してきた者がいることが見出された。このB科目履修者とAB科目共の履修者を合わせると60%を超えていた。なお世界史は高校での必修科目であり、各年度とも未履修者は集計上少数に留まった。

次に、世界史Aのそれぞれの履修状況ごとの平均点は、各履修状況の標準単位数の増

加に対応して高くなっていることが見出された。すなわち、A科目のみ履修、B科目のみ履修、AB科目共に履修の順で、平均点の上昇がみとめられた。

4-1-2 日本史A

日本史Aの受験者の中にも、B科目の履修者、さらにAB科目を共に履修してきた者がおり、それらを合計すると過半数を超えていた。さらに日本史では、高校で日本史がAB科目共に未履修であるのにも関わらず、日本史Aを受験している者が若干名いることがわかった。

履修状況ごとの平均点は、世界史A同様、各履修状況での標準単位数の増加に対応して高くなっていることがみとめられた。

4-1-3 地理A

地理Aにも、B科目の履修者、AB科目を共に履修していた者がいたが、それらの合計は40%未満に留まっており、他の科目よりはA科目のみ履修の受験者の割合が4割以上とやや高かった。その一方、地理A受験者の中には、地理の未履修の者が、平成9年度で

12%、10年度では20%、さらに11年度では25%と多く、年度を追うごとに増加の傾向が見受けられた。この高校での未履修科目による受験という奇異な現象の検討については後段で行う。

なお平均点については、他の科目同様、各履修状況での標準単位数に対応して上昇していた。

図 4-1 [世界史A] 受験者の履修状況と平均点 (H9:941, H10:1023, H11:602)

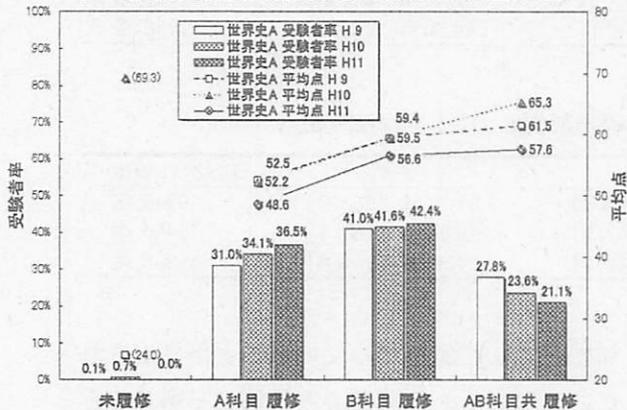


図 4-2 [日本史A] 受験者の履修状況と平均点 (H9:1195, H10:1223, H11:667)

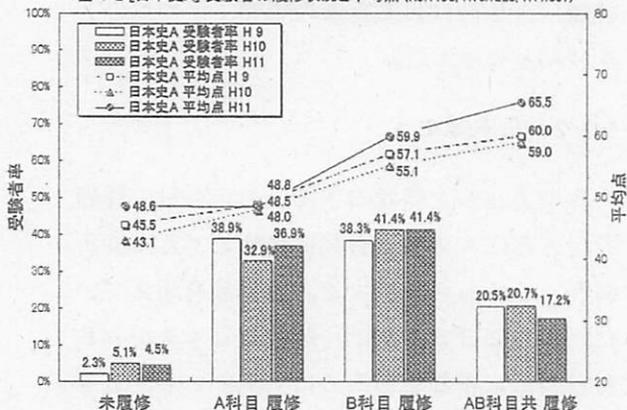
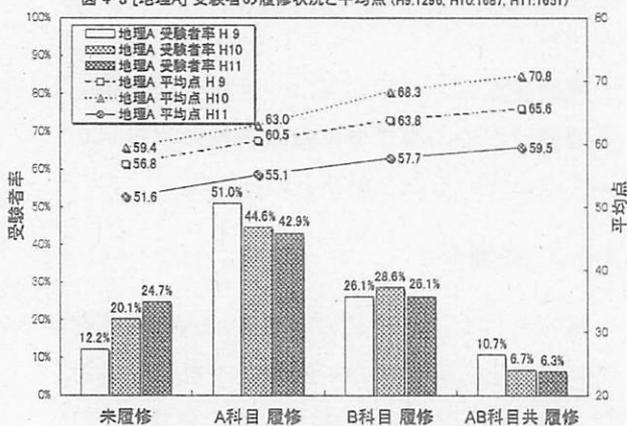


図 4-3 [地理A] 受験者の履修状況と平均点 (H9:1296, H10:1667, H11:1651)



4-2 理科A科目

理科の各科目ごとに、高校でのA、B科目

の履修状況とセンター試験での平均点を示す。物理I A、化学I A、生物I A、および地学I Aについて、それぞれ図 4-4、図 4-5、図 4-6、図 4-7 に図示する。

4-2-1 物理I A

物理I Aでは、B科目を履修してきた者の受験が最も多い。このB科目受験者にAB科目を共に履修してきた受験者を合計すると実に80%にも及ぶ。一方、A科目のみの履修者の割合は10%未満と少ない。さらに、高校では物理が未履修であるにも関わらず、物理Aを受験している者が同程度いることがわかった。

平均点に関しては、全般に高得点で、履修状況に伴う特徴的な傾向は見出されなかった。

4-2-2 化学I A

化学I Aは、B科目、AB科目を共に履修していた者が他の科目と比較して最も多く、合計で85%を超えていた。そのため、A科目のみ履修者は10%程度に留まっていた。

平均点については、各履修状況での標準単位数に対応して上昇していた。

4-2-3 生物I A

生物I Aにおいても、B科目の履修者、A B科目を共に履修していた者が多く、80%に及んでいた。そのため、A科目のみの履修者による受験は10%程度であった。さらに生物I Aにも、未履修の受験者が6%程度見出された。

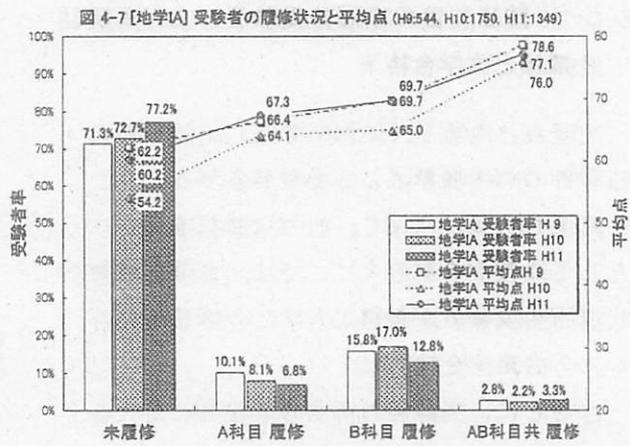
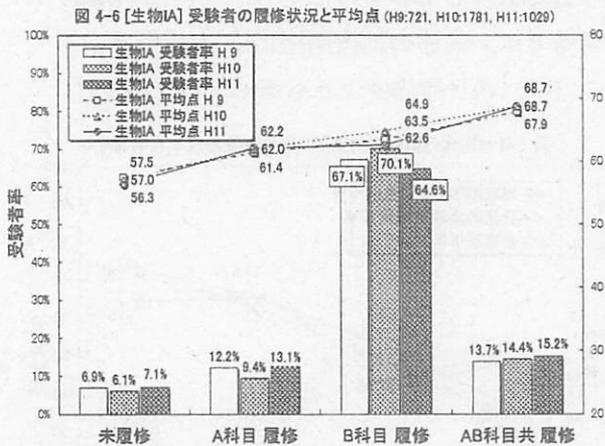
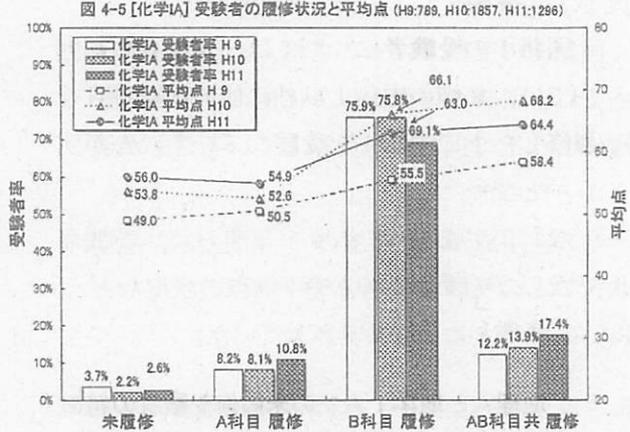
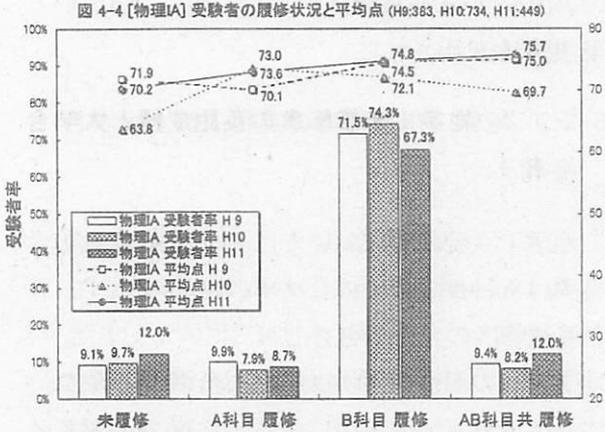
なお、得点に関しては、各履修状況での標準単位数の増加に対応して高くなっていった。

4-2-4 地学I A

地学I Aにおいて特徴的だったのは、高校で地学が未履修である者の受験が最も多く、70%以上に至っていたことである。この結果については、先段の地理Aと合わせて後段で

別途検証する。なお、A科目のみ履修者の受験は10%であった。

平均点に関しては、他の多くの科目同様に標準単位数の増加に対応して高くなっていった。



4-3 国語 I 科目

国語 I の受験者の中での、高校での国語 I、および国語 II 等の履修状況と、センター試験平均点を表 4-1 に示す。

4-3-1 国語 I

国語 I の受験者においては、高校時に国語

I しか履修していなかった者は、本調査の範囲内では極めて少数に留まっており、他の受験者は高校時に国語 II などを履修していた。すなわち、高校において国語 I は必修であるので、各受験者は国語 I を履修した上で、他の国語科目である国語 II、国語表現、現代文、現代語、古典 I、古典 II、古典講読などを履修していた。

表 4-1 H9-H11 国語の履修状況と各平均値 ([] 内は平均点)

	国語 I のみの履修者	国語 II 等の履修者
H9 受験者数	1 [(120.0)]	6,564 [166.9]
H10 受験者数	6 [(150.7)]	13,467 [155.9]
H11 受験者数	10 [(142.6)]	12,930 [154.9]

() 内は対象が少数のため、あくまで参考数値

4-4 教科ごとの傾向のまとめ

地歴 A 科目、理科 A 科目ともに、高校時に B 科目を履修、もしくは A B 科目を共に履修

していた者が A 科目を受験したケースが見出された。特に理科においては、B 科目履修者による A 科目の受験の割合が高いのが特徴的である。さらに、地歴における地理 A、理科

における地学 I A では、高校時点で該当科目の未履修の者がセンター試験でその科目を選択して受験をしていることが判明した。

国語 I の受験者については、本調査の範囲内では、必修の国語 I 以外に他の国語科目を履修した上で国語 I を受験していることが明らかとなった。

なお、平成 9-11 年度の 3 年間とも、履修状況ごとの受験者の割合や平均点の状況などは、各教科とも全般に安定していた。

5. 地理 A と地学 I A での未履修受験者の特徴

5-1 該当科目の未履修受験者における英語成績と大学合格率

地理 A と地学 I A においては、高校時の当該科目の未履修者による受験が多かった。この異色の集団に関して、他の指標を手がかりとした検討を試みた。ここでは、まず各履修状況の受験者が最終的に大学に合格したか否かの合格率を検討した。

さらに、当該科目の得点の情報に加え、各履修状況の受験者が広く共通に受験している英語の得点を、受験者集団の受験学力の一指標として利用した。この英語の得点は、文科系の受験者の受験科目にも、理科系の受験科目にも比較的高い相関を示すことが知られている(池田, 1983)。

地理 A と地学 I A の平成 9 年度のデータを基に、各履修状況ごとの大学合格者を 図 5-1、図 5-2 に示す。加えて、該当科目の得点と英語の得点を、比較のため偏差値化した上でその平均も示した。なお、地学 I A において A B 科目とも履修した者は 50 名に至らなかったため、合格率の分析からは除外した。

5-1-1 地理 A 未履修者の英語成績と大学合格率

地理 A 受験者では、地理未履修者の合格率が A 科目を履修して受験した者の合格率を上回っていた。さらに、地理 A の偏差値平均は

履修の標準単位数に応じて上昇しているのに対し、英語の偏差値平均では、未履修者のものの方が A 科目履修者よりも高くなっている現象が見出された。

5-1-2 地学 I 未履修者の英語成績と大学合格率

地学 I A 受験者においては、未履修者の合格率は A 科目履修者の合格率のみならず、B 科目履修者の合格率をも上回っていた。また、地学 I A の偏差値平均は履修の標準単位数に応じて上昇しているのに対し、英語の偏差値平均では、先述の地理同様に未履修者のものの方が A 科目履修者よりも高くなっていた。

図 5-1 H9 [地理A]・[英語]の平均偏差値と大学合格率

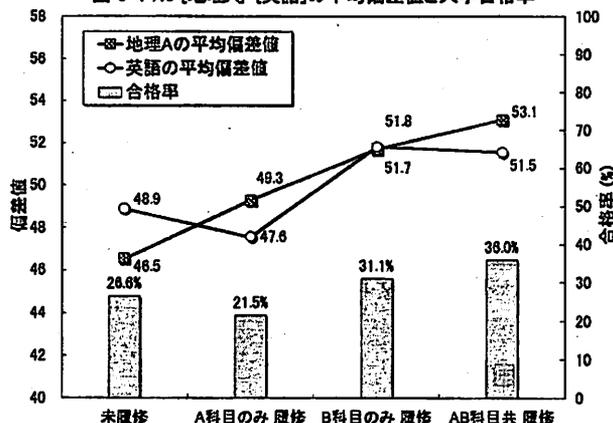
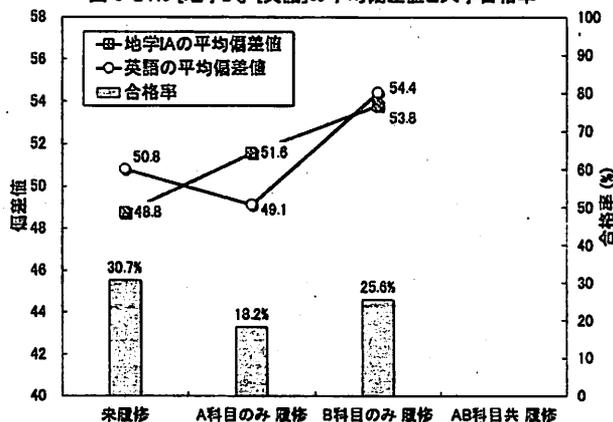


図 5-2 H9 [地学IA]・[英語]の平均偏差値と大学合格率



5-2 該当科目の未履修受験者における同系列教科の科目受験状況

高校時の当該科目の未履修者による受験が多い地理 A と地学 I A について、この集団がセンター試験において、別の時間枠で受験可

能な同系列教科の科目の受験状況について集計した。

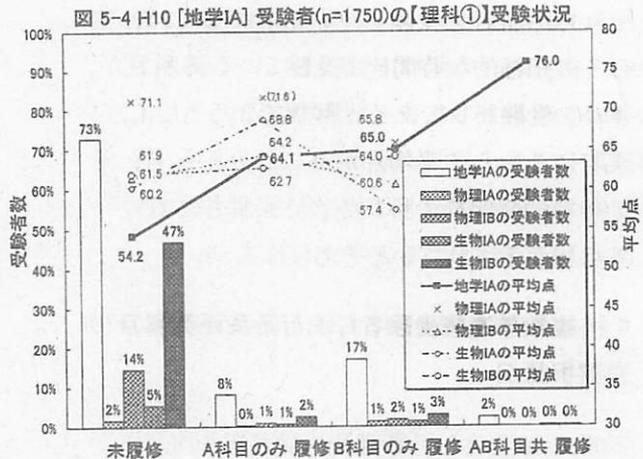
平成10年度の地理A受験者については、同じ社会科系の公民科目の受験状況とその平均点を図5-3に示した。また、地学IA受験者については、同じく理科系科目であり、センター試験の別時間枠の理科①で受験可能な物理、生物の受験状況と平均点を図5-4に示した。

5-2-1 地理A未履修者の公民科目受験率とその成績

地理A受験者の地理未履修者のうち、その75%が公民のいずれかの科目を受験していた。そして、その公民科目の平均点は、いずれも地理Aの平均を上まわっていることが見出された。

5-2-2 地学IA未履修者の理科①科目受験率とその成績

地学IA受験者の未履修者においては、そのうちの2/3あまりが集中して理科①時間枠の中の生物IBを受験していた。さらに平均点では、この生物IBを含めた理科①枠の全ての科目平均点が、地学IAの平均を上まわっていた。



5-3 該当科目未履修者によるA科目受験

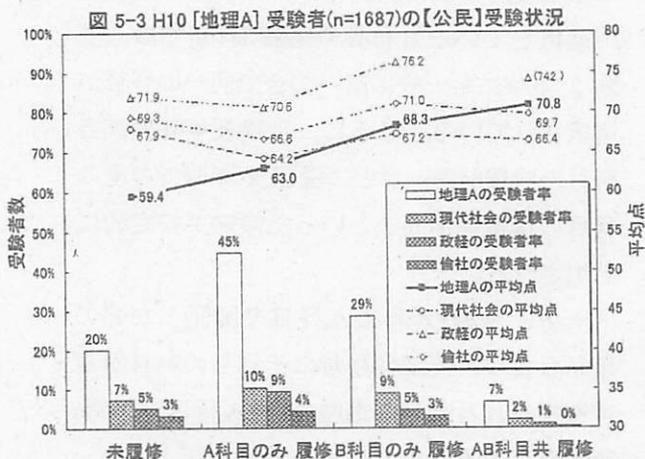
現在、入試科目としては、社会系教科としては地歴と公民から1科目、また理科系教科でも1科目を入試科目として指定する大学が多い。加えて、それぞれの教科系の中で複数の科目が受験されている場合は、いずれか得点の高いものが採用されることが多い。

受験生にとっては、主たる受験科目に熱意を持って向かうことはもちろんであるが、センター試験の時間枠の設定により、本来準備していない科目を受験する機会が生ずるとも考えられる。このような受験機会は、センター試験で受験した科目のすべてが必ずしも入学選抜の資料になるとは限らないという、アラカルト方式に特有の現象であるものと考えられる

地学を例にとると、地学は文科系受験者に比較的選択されることの多い理科科目である。また、生物も文科系受験者に選択される傾向がより強い。この場合、受験者が生物を主たる受験科目として理科①の時間枠で受験し、理科②の時間枠ではより自由度の高い科目選択の中で、地学の受験を行っているとも解釈できよう。

同様に、地理は理科系受験者に選択されることの多い社会系科目であり、公民の時間枠もその相補的な位置にあるものと考えられる。

したがって、高校で地理Aや地学IAを履修していないにもかかわらず、センター試験で

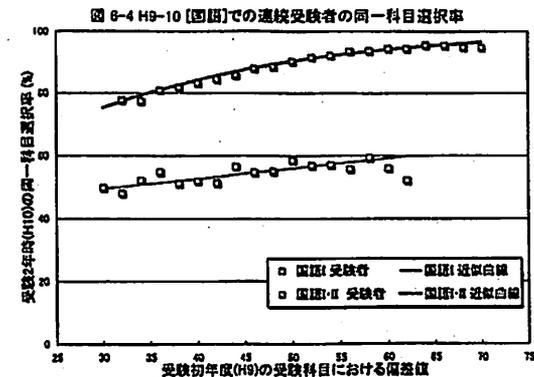
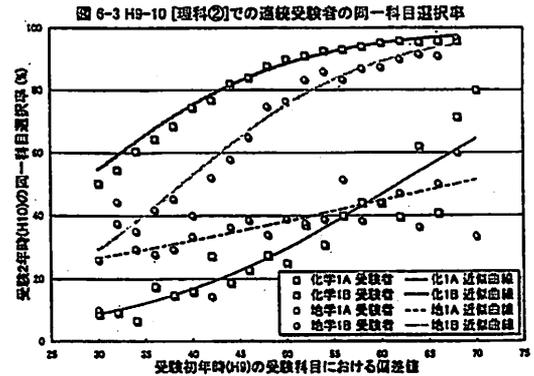
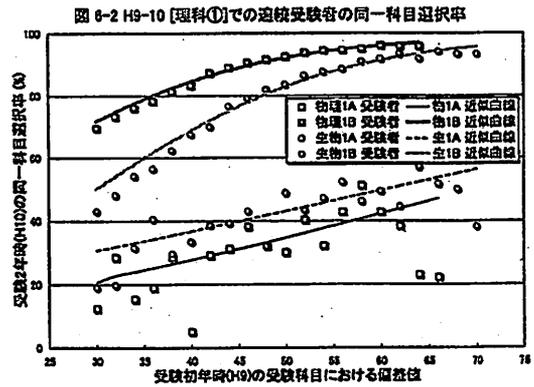
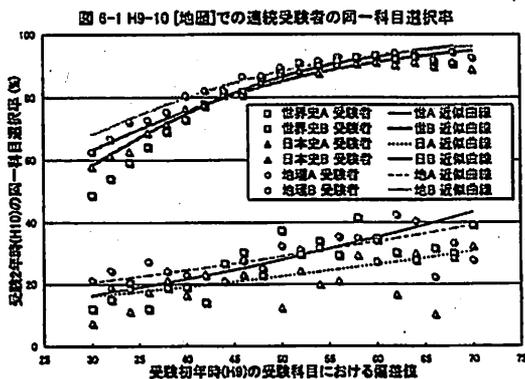


それらの科目を受験している者の多くは、実はその相補的な時間枠で受験している科目が、本命の受験科目であると解釈できる。そして、実際にそちらの平均点が高いことから、その相補的時間枠の科目の得点が採用されている様相が示されていると考えられる。

6. 複数年連続受験者における同系列科目の選択状況

平成9年度から新課程入試が実施され、一般の平成12年度入試で、はや4年が経過した。また、本プロジェクトの調査についても3年分が蓄積されてきた。このような経緯の中で、鈴木・内田(1999)は新課程科目導入に伴う影響について、複数年連続受験者に焦点を絞りその受験行動について検討を行っている。ここでは、その研究から、本プロジェクトに関連する新科目についての連続受験者の科目選択行動について紹介する。すなわち、センター試験全体を対象として、いわゆる浪人が、複数年次の受験にあたり同系列の科目をどのように選択しているかについての集計結果を示す。

センター試験の受験時間枠ごとに、A科目のみならず、B科目も含めた同系列の科目を対象とした。そして、H9-H10にわたる連続受験者について、受験初年時の科目成績ごとの、受験2年時の同一科目選択率を示した。地歴、理科①、理科②、および国語について、それぞれ、図6-1から図6-4に示す。



図から読み取れるように、一般に旧課程からの継続的な性格が強く、また多数の受験者が選択しているB科目や国語I・IIでは、受験2年時にも一般に高い割合で同一の科目が選択されている。さらに、受験初年時の該当科目の成績が高いほど、受験2年時でのその科目の選択率が高いといった傾向が安定的に見出される。

一方、地歴・理科のA科目や国語Iなどの新科目では、連続受験時にそれらの科目が再度選択される割合が地歴・理科A科目で40%程度以下、国語Iでも60%程度以下と低い。また、図には表示されていないが、受験2年時において、該当時間枠に受験しなくなる者の割合が比較的高い点が特徴的である。

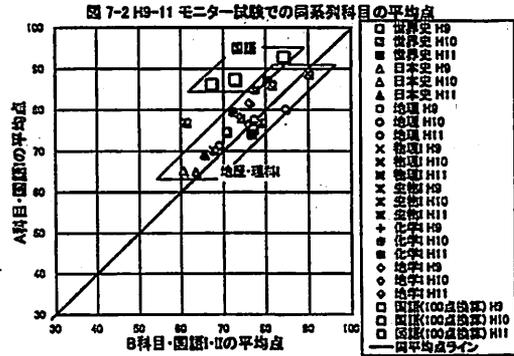
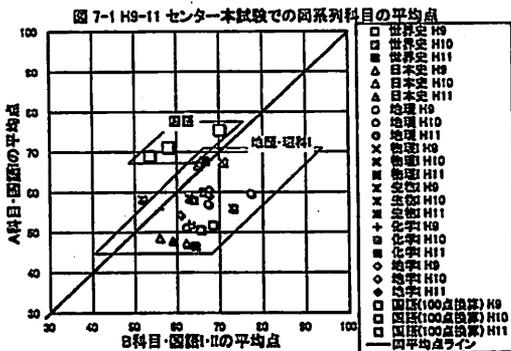
7. センター試験におけるA科目および国語Iの現況

7-1 センター本試験およびモニター試験における同一系列科目の平均点の比較

A科目や国語Iといった新科目に関する調査研究である本プロジェクトの背景には、従来型のB科目との対比の視点が暗黙裡にあるものと考えられる。ここでは、平成9-11年度のセンター本試験におけるそれら同系列科目の平均点について概観する。

しかし、センター本試験においては、これらの同系列科目は異なった受験者が受験しているため、その難易度について直接言及することは困難である。そこで、大学入試センター研究開発部が実施しているモニター試験の結果を参考に示す。このモニター試験は、センター試験の当日、国立大学の1年生約300名にセンター試験の問題を解いてもらい、各種情報を得ることを目的として実施されているものである。そこでは、同系列のA、B科目については同じ受験者が双方とも解いているため、ある程度の比較が可能であると考えられる。なお、国語については、学力が同等と考えられる2群、それぞれ約150名が解答している。

従来型のB科目、国語I・IIの平均点に対して、A科目、国語Iの平均点を図に示す。センター本試験での結果を図7-1、モニター試験の結果を図7-2に示す。



7-1-1 地歴・理科Iの同系列科目に関する検討

地歴・理科における同系列のA科目とB科目の平均点に注目する。まず、センター本試験でのA科目の平均点は、全般的にB科目の平均点に比べて全般に低く推移してきたことが図7-1より読み取れる。

一方、モニター試験では、地歴・理科のA-B科目の平均点は比較的揃っており、センター本試験とは異なった様相を示している。同一の受験者が受験した場合に、ほぼ同等の平均点が観測されていることから、これらA-B科目の問題の難易度は比較的よく揃っているものと解釈することもできる。しかし、このモニター試験受験者の多くはB科目で受験して入学している者であるため、必ずしもセンター本試験の受験者全体と同等の性質を備えているとは仮定できない点に留意する必要がある。また、みかけの平均点が揃っていたとしても、その測定している内容側面の差異については現時点では言及できない。

両者の結果をまとめると、現時点でのセンター本試験における新科目の受験者は、従来型の科目の受験者よりも相対的に学力の低い受験者が受験している可能性がある。しかし、この新科目受験者には、先の図5-3で見出された本来受験準備をしていない科目の受験、比較的自由的な試験時間枠での次善策的な受験行動の結果が含まれている可能性にも留意する必要がある。

7-1-2 国語の同系列科目の平均点に関する検討

国語については、センター本試験、モニター試験とも、国語Ⅰ・Ⅱの平均点に対して、国語Ⅰの平均点が全般的に高く推移している。これについては、国語Ⅰは高校必修科目であり、国語Ⅱなどの他の国語科目はその上に積み上げていく形になっているため、現在の方式をとる限り、やむを得ないものと考えられる。

7-2 地歴・理科A科目および国語Ⅰの受験者数の年次推移

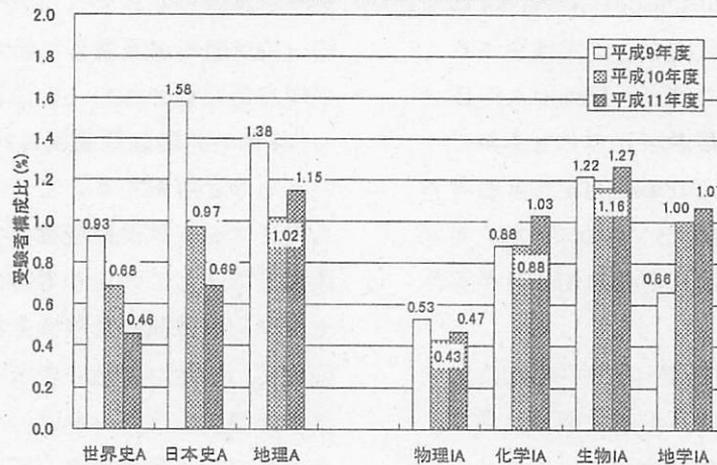
7-2-1 地歴・理科ⅠにおけるA科目の受験者数の年次推移

平成9-11年度のセンター試験でのA科目受験者数の年次推移を図7-3に示す。

地歴については、世界史Aと日本史Aにおいて受験者の減少がみられる。このことは、平成9年度から11年度にかけて公民科目、特に現代社会の受験者数が増加し(cf. 現代社会：45,922名(センター試験受験者比8.1%)→89,372名(14.7%)→158,411名(24.4%))、社会科系における受験生の公民への流入とあいまった現象であろうと考えられる。なお、倫理は微増(6.2%→8.2%→7.3%)、政経はほぼ横ばい(8.6%→8.6%→8.4%)である。

なお、理科Ⅰに関しては、物理ⅠA、生物ⅠA、および化学ⅠAでは目立った増減は見られないが、地学ⅠAにおいては増加の傾向がみとめられよう。

図7-3 センター試験 A科目受験者構成比の年次推移



7-2-2 国語における国語Ⅰの受験者数の年次推移

センター試験では平成9年から11年にかけては受験者が減少しているにも関わらず、国語Ⅰに関しては、平成9年度に58,951名(センター試験受験者比10.7%)であった受験者が、10年度には65,306名(11.9%)、11年度には74,621名(14.0%)と増加傾向にある。

8. まとめ

本プロジェクトにおける3年間にわたる調査を分析して得られた知見は以下の通りである。まず、3年間の調査結果を通じ、比較的安定して見出された傾向は次の通りである。

- (1) 高校においてB科目や国語Ⅱなどを履修してきた者が、かなりの割合でA科目や国語Ⅰを受験していることが示された。その傾向は、特に物理ⅠA、化学ⅠA、

生物I Aにおいて顕著である。

- (2) 地理A, 地学I Aについては, 高校で該当科目の未履修の者による受験が多数あることが見出された。
- (3) 地理A, 地学I Aの未履修受験者での大学合格率は, A科目履修者によるA科目受験での合格率より高く, また英語の成績も高いことが示された。さらに, その受験者においては, センター試験の相補的な時間枠にある同系列教科の科目を受験している割合が高く, そちらの成績の方が高いことが見出された。
- 次に, センター本試験, およびモニター試験における結果から見出された傾向は下記の通りである。
- (4) 連続受験者において, A科目や国語Iなどの新科目を再度選択する割合は, B科目や国語I・IIを再度選択する者に比べて全体的に低く, A科目で40%程度以下, 国語Iでも60%程度以下に留まっていた。
- (5) 地歴・理科における同系列のA科目とB科目は, 問題の難易度ではほぼ同等であるものと解釈された。
- (6) 受験者数の年次推移としては, 世界史A, 日本史Aの受験者は減少傾向にあり, 一方, 公民科目の現代社会の受験者が増加傾向にある。また, 国語I, 地学I Aの受験者はいくらか増加傾向にある。

参考文献

- 池田央(1983)共通1次試験の教科・科目間の相関 大学入試フォーラム No. 2, 54-61.
- 鈴木規夫・内田照久(1999)大学入試センター試験連続志願者の科目選択 —新課程科目導入に伴う影響を中心にして— 大学入試センター研究紀要, No. 29, 9-30.
- 内田照久・林篤裕・岩坪秀一(1998)平成9年度大学入試センター試験における地歴・理科A科目, および国語Iの受験動向調査国立大学入学者選抜研究連絡協議会第19会大

会 研究発表予稿集, 1-6.

内田照久・林篤裕・岩坪秀一(1999)平成10年度大学入試センター試験における地歴・理科A科目, および国語Iの受験動向調査—実施初年度と2年度目の比較— 国立大学入学者選抜研究連絡協議会第20会大会研究発表予稿集, 1-6.

付表 入研協研究プロジェクト参加大学

北海道教育大学, 小樽商科大学, 帯広畜産大学, 旭川医科大学, 弘前大学, 岩手大学, 東北大学, 秋田大学, 福島大学, 茨城大学, 筑波大学, 宇都宮大学, 群馬大学, 埼玉大学, 千葉大学, 東京外国語大学, 東京水産大学, お茶の水女子大学, 電気通信大学, 横浜国立大学, 新潟大学, 長岡技術科学大学, 富山大学, 富山医科薬科大学, 金沢大学, 福井大学, 岐阜大学, 静岡大学, 浜松医科大学, 三重大学, 京都教育大学, 京都工芸繊維大学, 大阪大学, 大阪外国語大学, 神戸大学, 神戸商船大学, 奈良教育大学, 奈良女子大学, 鳥取大学, 岡山大学, 広島大学, 鳴門教育大学, 香川医科大学, 高知大学, 高知医科大学, 福岡教育大学, 九州工業大学, 佐賀大学, 佐賀医科大学, 熊本大学, 大分医科大学, 宮崎大学, 宮崎医科大学, 鹿児島大学, 琉球大学.

以上, 上記の55大学が研究に参加した。